



TITLE:

世話人の記(III.感想,基研「二次相転移及び不可逆過程の基礎理論研究会」報告)

AUTHOR(S):

西川, 恭治

---

CITATION:

西川, 恭治. 世話人の記(III.感想,基研「二次相転移及び不可逆過程の基礎理論研究会」報告). 物性研究 1965, 3(6): 450-451

ISSUE DATE:

1965-03-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/85668>

RIGHT:

## 世 話 人 の 記

西 川 恭 治

今回の研究会は、北は東北、南は九州に至る各地から40名以上もの参加者をえた。延に5日間にわたる大規模な研究会であつた。こういう研究会は、ともすると年会とさして変らぬ報告の羅列になり、参加者は退屈疲労するばかりで、得る所少く終りがちである。これを実のあるものにするためには、十分な準備と計画が必要であつた。果して今回の研究会がどうであつたかは、参加者の判断に任せる事にして、ここでは世話人の一人として、裏話ならぬ感想めいた事を書いてみようと思う。

まず研究会の主題について。二次相転移というと、現象は似ていても、それを起す物質は無数にある。従つてここではまず対象をしぼる事が必要であつた。その結果、まず超伝導超流動関係は別の研究会を持つたので除き、又誘電体も除いて、殆んど磁性体に限る事になつた。次にその上で、テーマを熱力学的関数の異常性と、それに関連したダイナミカルな問題にしぼつた。しかし、ダイナミカルな問題に関する限り、世話人の現状認識の不足から、必ずしもこの通りに行かなかつたようである。一方、不可逆過程関係では、最初は研究会通知(物性研究 3 186)にあるようないくつかのテーマにしぼる予定でいたが、その後この計画は実行不可能となつて、Brown運動やThermal disturbanceの問題が主要テーマとなつた。これはよいとしても、最初の計画が殆んど実現されなかつたのは、世話人の問題認識の不足と併せて、この種の研究会の一種の限界を表わしているようにも思われる。即ち、この種の研究会はどうしてもでき上つた仕事の報告が主になり、ある特定の問題を一つの角度から考え直してみるという目的のためには、少数グループの、かなり長期にわたる研究会が必要の様に思われる。

次に研究会の進め方について。主題をしぼつたといつてもしぼり切れないのが研究会の特徴であるが、個々の研究発表を羅列するだけでなく、少しでもまとめるために考え出したのが、各日毎にテーマと司会者をきめて、司会者に半

ば独断的に進行していただくという方法である。これは、世話人と司会者の間の連絡が早くからとれていた場合は成功したが、それ以外では必ずしもうまく行つたとはいえない。ここでも世話人の現状認識の不足が禍した事は認めねばならない。又、5日間という長期研究会で、参加者の疲労を防ぐためと、又交流を行うために、3日目の午後、大文字山へレクリエーションを行つたが、これは少し強行軍に過ぎたようであつた。むしろ、懇親会を行つた方がよかつたかもしれない。

次に参加者の構成について。今回は第一線の研究者が大勢集まり壮観だつたが、反面いささか観艦式的であつたという批判もある。若手の参加者が少ないという事について、曾田さん批判があるが、世話人としては参加資格に第一線研究者と若手の区別はつけていない。従つてでき上つた仕事のあるなしにかかわらず、参加したい人は参加できるようになつている。しかし、若手自身としては、やはり特定の問題意識をもつて参加し、討論に加われるようにした方が望ましいと思う。そのためには、今回のような大型研究会より、特定のテーマについての少数グループの方がよいかもしれない。又、成人教育的研究会を持つ事も考えられるが、これは果してどれだけ有効か。私自身は疑問である。

最後に世話人の構成について。放言を少し。今回の世話人は、いわば一国一城の主四人に足軽二人という感じであつた。それも主が東京、名古屋、京都に分散していて、足軽はよろしくかけずりまわされたのだが、やはり一つの研究会に主四人は多すぎたと思う。主が多ければそれだけ一つの事も決めにくく、又四人寄つて文珠の知恵とも行かないようである。理想は、独裁的主一人に足軽1乃至2名という所だろうが。

以上放言をもつてしめくくりとします。

(研究会の日中にレクリエーションして大文字山へのぼつた時の写真が出来ています。御希望の方は 京大理物理 川崎 辰夫まで御連絡下さい。京都での分科会の際お渡しいたします)